令和６年度　八王子市立松木小学校　学校経営計画報告書

校長　河村　真奈美

今年度、「学校経営計画」に基づいて行った取組について、成果および課題について以下のように報告いたします。

（１）確かな学力の定着

①授業改善　「教師は授業で勝負する」

授業を充実させるための努力を惜しまず、児童にとって楽しく、分かる授業を実現する。

【方策】⇒　〇主体的・対話的に、見方・考え方を働かせた深い学びの実現に向けた授業づくりをする。

〇学力・体力調査における分析結果から課題を明確にし、授業改善につなげる。

〇常に、計画（Plan）・実施（Ｄｏ）・評価（Check）・改善（Action）のＰＤＣＡサイクルを意識して取り組む。

②基礎・基本の定着　「分かった！できた！を実感させる」

「個別最適な学び」に取り組ませることを通して、すべての児童に基礎的・基本的な知識や技能を身に付けさせる。

【方策】⇒　〇支援の必要な児童には重点的に個別指導を行う。

〇個に応じて指導方法・教材や学習環境等を柔軟に提供する。（①②指導の個別化）

〇個に応じた学習活動や学習課題に取り組む機会を提供する。（学習の個性化）

〇学習用端末をはじめ ICT 機器の活用スキルの向上を図り、授業の中で効果的に活用する。

③体力の向上

将来を担う児童にとって、生きる力の極めて重要な要素である体力の向上を図る。

【方策】⇒　〇楽しくて夢中になれる授業、体の動かし方やうまくなるためのコツがわかる授業を工夫する。

〇学期ごとに行う体力向上の取組（１学期：長縄　２学期：持久走　３学期：短縄）を工夫・改善することで、体力づくりや運動に親しむ態度を育てる。

〇外遊びの励行やたてわり班遊びなど、体を動かす機会を積極的に設ける。

④新しい課題に対応した教育の推進

プログラミング教育、ＥＳＤ教育（ＳＤＧs）、キャリア教育、ソサイエティ 5.0 に向けた人材育成などの教育課題について、取り組む。

【方策】⇒　〇教育課題を整理して担当を置き、出張研修や自己研さんの成果を学校全体に周知・還元していく。

〇総合的な学習の時間を中心に、各教科・領域の学習において、意図的・計画的に教育課題を取り入れていく。

〇学校コーディネーターと連携し、ゲストティーチャーを招いて授業を行うなど、外部人材を積極的に活用する。

【成果と課題】

◇授業改善　基礎・基本の定着

校内研究における授業力向上の取組の一環として、教員が３人１組になり、授業を見合う体制を整えた。このことは、短時間でも気軽に授業を見合い、学んだり助言をしたりすることができるため、授業改善をするうえで、有効な方策であったと考える。

しかし、見合った授業に関して改めて時間を設定し、３人で協議をするということがなかなか難しく、見合ったことをどう授業者に返していくのかということについては課題が残った。どうしても、授業づくり（Plan）と授業展開（Do）については時間をかけて検討するが、振り返り（Check）からの授業改善（Action）が弱い部分がある。来年度は、（Check）からの授業改善（Action）に力を入れていきたい。

基礎・基本の定着に関しては、学力調査等の分析を行い、児童の課題を教員間で共通理解したうえで授業づくりに取り組むようにしている。特に、４年生以上は「市の学力調査」があり、６年生に関しては、「はちおうじっ子ミニマム」も実施していることから、学習における児童の実態が見えやすい。したがって、分析結果を、即学習指導に生かしていくことができた。

一方で、１～３年生に関しては、全学年で毎学期行っている「計算・漢字オリンピック」（本校独自のミニマム）で基礎・基本の定着を確認しているが、結果の分析やその共有が十分にできているとは言えない。学校評価保護者アンケートでも、「計算・漢字オリンピック」を学習の意欲付けとして活用してほしいというご意見もあったので、来年度以降、実施方法について再検討していく必要がある。

加えて、松木プリント（ベーシックドリル）に熱心に取り組んでいる学年は、学力調査やミニマムにおいて、知識理解分野の正答率が高いという傾向があるため、来年度も、松木プリントへの取組に力を入れていく。

【学校評価アンケートより】

Q.学校では、分かりやすい授業が行われている。（保護者）

Q.担任の先生の教え方は分かりやすい。（児童）

	保護者		児　童	
前期	78.3%		96.4%	
後期	78.7%	＋0.4%	96.0%	－0.4%

Q.学校は、授業において、説明、板書、話合い活動、ICT 機器（１人１台学習用端末を含む）の活用などの工夫に取り組んでいる。（保護者・児童）

	保護者		児　童	
前期	86.0%		83.5%	
後期	87.7%	＋1.7%	90.6%	＋7.1%

Q.学校は、基礎・基本の学力の定着に取り組んでいる。（漢字・計算オリンピック、算数補習教室、松木プリント）（児童）

	保護者		児　童	
前期	設問なし		87.7%	
後期	設問なし		90.7%	＋3.0%

◇体力の向上

楽しくて夢中になれる授業、体の動かし方やうまくなるためのコツがわかる授業については、各担任が意識しながら実施されている。明確な評価根拠がないため、達成度を提示しにくいが、児童が書いた学習の振り返りからは、「授業が楽しかった」、「〇〇のし方が分かった」、「〇〇のコツがつかめた」などの記述がうかがえる。

学期ごとに行う体力向上の取組（１学期：長縄　２学期：持久走　３学期：短縄）については、計画的に実施することができたが、どの取組も期間が短いため、十分に体力づくりや運動に親しむ態度を育てることができたかというと取組効果が弱い。取組期間については検討していく。

担任は、可能な限り外遊びをして児童と一緒に体を動かし、学校生活における運動量の確保に努めていた。

◇新しい課題に対応した教育の推進

プログラミング教育、ＥＳＤ教育（ＳＤＧs）、キャリア教育、などについては、各教科や総合的な学習の時間の中に意図的、計画的に組み込み、学年の発達段階に応じて学習させたり指導したりした。

学習の内容によっては、地域学校協働活動推進員と連携し、積極的に外部人材を活用することができた。

（２）豊かな心の醸成

①人権教育の推進と道徳教育の充実

児童一人一人が発達段階に応じて人権の意義や内容、重要性について理解し、自他を大切にする行動につなげていけるようにする。「特別の教科　道徳」を中心に心の教育を行う。

【方策】⇒　〇教科指導、生活指導、学級経営などを通じて、人権が尊重される学習活動づくり、人間関係づくり、環境づくりに努める。

〇人権教育プログラム（研修冊子）、外部講師を活用して人権に関する研修を行い、教職員の人権感覚を磨く。

〇「特別の教科　道徳」の授業や教育活動全般を通して、あいさつや礼儀、善悪の判断、思いやりの心、規範意識などを身に付けさせる。

〇道徳授業地区公開講座では、公開授業や意見交換会を通して家庭や地域における道徳教育を啓発し、学校・保護者・地域が一体となって児童の健全育成に取り組む。

②いじめ防止・いじめ対応の強化

いじめは絶対に許さないという教職員の共通認識・指導のもと、児童が安心して楽しく通える学校を実現する。

【方策】⇒　○児童の小さな変化も見逃さないための教職員の意識と感覚を高める。
○学校いじめ対策委員会（木曜日：６校時）を毎週確実に実施し、組織的にいじめの予防、早期発見・対応・解決に取り組む。
○「八王子市いのちの大切さを共に考える日」の取組、いじめ防止のための授業、代表委員会を中心とした自治的な活動を通して、いじめを許さない心情と態度を育てる。

【成果と課題】

◇人権教育の推進と道徳教育の充実

今年度も昨年度同様、はちおうじっ子サミットに向けて代表委員会を中心に校内で取り組む中で、いじめが人権侵害であることを児童に認識させ、一人一人がかけがえのない存在であることを意識させるようにした。また、教科指導、生活指導、学級経営などを通じて、個が尊重される学習活動づくり、人間関係づくり、環境づくりにも努めてきた。

加えて、体育的行事、文化的行事、遠足・集団宿泊的行事、異学年交流活動などの事前指導や実際の活動の中で、互いを尊重し合い、望ましい人間関係を構築できるように意識して取り組むことができた。来年度も、すべての教育活動において、意図的に児童の人権感覚や相互理解の精神を磨くことができるようにする。

人権に関する教員研修については、服務事故防止月間の研修、職員会議や夕会における服務事故公表資料やふくむニュースレターなどをもとにした指導を通して、体罰や不適切な言動は、決して「指導」ではないことを繰り返し教職員に伝え、共通理解してきた。

道徳授業地区公開講座では、意見交換会が充実するような講師を選んで招くことができ、学校・保護者・地域が一体となって児童の健全育成に取り組むきっかけを作ることができたと考えている。

◇いじめ防止・いじめ対応の強化

学校いじめ対策委員会を軸とする組織的ないじめ対応が定着してきた。また、ふれあい月間に行ういじめのアンケート、松木小アンケートへの記述内容や、児童からの訴え、保護者からの相談や情報提供、教職員の見取りなどから把握したトラブルやいじめに対して、迅速に管理職やいじめ対策委員長に報告し、速やかに学年間で共有すること、聞き取りは複数教員で行うこと、適切に保護者に連絡することなどの対応力が教職員に定着してきた。

今後もいじめに対するアンテナを高く掲げ、小さなけんかやトラブルもいじめに発展しないよう、未然防止に努めていくとともに、早期発見早期対応を心がけていきたい。

【学校評価アンケートより】

Q.学校は、いじめの未然防止、早期発見、早期対応等、いじめを許さない学校づくりに組織的に取り組んでいるか？（保護者・児童）

	保護者		児　童	
前期	86.0%		89.3%	
後期	82.4%	−3.6%	85.4%	−3.9%

（３）特別支援教育

どの子も能力を最大限に伸ばすため、一人一人に応じた合理的配慮を行い、適切な支援が行われる環境を整備していく。

【方策】⇒　〇特別支援教育コーディネーターを中心に、校内委員会や特別支援教育に関わる研修を通して、教職員の特別支援への理解を深める。

〇児童理解を深めるとともに、特別支援の視点から一人一人の特性を踏まえ、日々の授業において具体的な支援や工夫、改善を行う。

〇特別支援教室（チャレンジ）における指導を充実させるとともに、指導のスキルやコツを各学級での指導に生かす。

【成果と課題】

どの子も安心して学んだり活動したりできる環境調整、どの子にも分かる指示や指導方法の工夫、個に応じた適切な支援を行うことを柱として、日常的に担任が主となって支援を行っている。特に外部機関等と連携する必要がある児童に関しては、特別支援教育コーディネーターを中心に、担任、養護教諭、特別支援教室専門員、スクールカウンセラー、巡回心理士が、日常的に情報交換・共有を行い、密に連携できている。

校内委員会には通級指導の拠点校（下柚木小学校）の教員や、スクールソーシャルワーカーも参加し、支援が必要な児童について共有した上で、対応策等を検討する貴重な時間となっている。また、特別支援教室（チャレンジ）の教員からは、個々の児童に対する支援や対応の方法を助言してもらうことも多々ある。

今年度、明星大学教授の星山麻木先生をお招きして研修会を行い、児童の様々な特性と、それに対する支援の仕方について学んだが、教職員の、特別支援教育に関する知識や支援技術については、まだまだ十分とは言えない。来年度は、東京学芸大学講師の松山康成先生をお招きし、研修を行う予定である。

学校評価保護者アンケートでは、学校が取り組んでいる特別支援教育について、十分ご理解いただけていないという結果が出ている。日常的に情報発信を行うほか、教員の研修会に保護者の方も参加し、一緒に学べるような機会を作っていく。

【学校評価アンケートより】

Q.学校は、特別支援教育（特別な支援を必要とする子どもに対しての教育）に取り組んでいる。

	保護者		児　童	
前期	66.7%		設問なし	
後期	72.2%	＋5.5%	設問なし	

（４）不登校対応・支援

魅力ある学校づくりを進める中で、児童の自己肯定感を高める。誰一人取り残されない学びの保障に向けて、児童一人一人の教育ニーズに寄り添った支援を行う。

【方策】⇒　〇児童に寄り添い、共感的理解と受容の姿勢をもち、子供の自己肯定感を高める。

〇児童や保護者を孤立させないための支援体制づくりとして、スクールカ

ウンセラーやスクールソーシャルワーカー、医療、福祉機関等と連携し、組織的・計画的な支援を行う。

〇学級以外に落ち着ける場所を作り、登校支援コーディネーターを核とした支援員による支援体制を確立する。

【成果と課題】

児童の自己肯定感を高め、どの子も充実感・満足感が得られる学校づくりを目標として、日々の教育活動に力を注いだ。

登校することや教室にいることに困難さを抱えている児童を別室で受け入れ、支援する体制を整えたことにより、長期欠席児童が減った。支援の結果、毎日登校して全日教室で過ごせるようになった児童や、１日のうち数時間別室を利用しながら、教室でも学習できるようになった児童もいる。

来年度は、少し体制が変わる可能性があるが、どの子も誰かと、どこかとつながれるように、来年度も、この登校支援の体制をなんとか継続していきたい。

（５）小中一貫教育

義務教育修了時に向けて、児童一人一人の個性や能力の伸長を図るために、義務教育９年間を通じた小中一貫教育を推進する。

★松木中学校グループにおける育てたい児童・生徒像

人のつながりを大切にし、進んで地域にかかわる児童・生徒

【方策】⇒　〇松木中学校グループにおける「小中一貫教育に関わる具体的な取組計画」に基づき、小中一貫教育の具体的な取組を推進する。

〇小学校段階で身に付けるべき力を、学習および生活の点から整理し、同じ中学校区の長池小学校とも連携、協力しながら系統的に身に付けさせる。

〇望ましい中学生の姿をキャリア目標とするために、学校行事や職場体験、地域行事などの場を活用して、積極的に中学生と関わらせる。

【成果と課題】

今年度も、松木中学校小中一貫グループ（松木中、長池小、松木小）は、「小中一貫教育に関わる具体的な取組計画」に基づき、「人のつながりを大切にし、すすんで地域にかかわる児童・生徒」を育てたい児童・生徒像として掲げ、９年間を通じた小中一貫教育を推進してきた。

小中一貫の日の授業参観、分科会（学力向上、児童・生徒理解、タブレット活用、郷土学習教材開発）ごとに小中で一貫して取り組む内容を話し合うなど、教職員の交流に加えて、児童・生徒同士の交流をこれまで以上に多く設定するようにした。

その結果、小学生が中学校生活のイメージをもち、安心して進学するための架け橋になったこと、また、長池小学校と松木小学校の児童が、松木中学校で良好な人間関係を築くための交流の場になったことなど、成果が見られた。

来年度は、分科会の構成を一新する。これからも三校で協力しながら、よりよい小中一貫教育のあり方を探っていきたい。

【学校評価アンケートより】

Q.本校が、松木中学校、長池小学校と合同で行う取組（小中一貫教育）を知っている。

	保護者		児　童	
前期	95.3%		59.8%	
後期	96.3%	＋1.0%	69.2%	

（６）学校運営協議会と協働した学校運営

保護者や地域の声を学校運営に積極的に生かし、地域とともにある学校づくりや、課題解決に向けた取り組みを効果的に進める。学校運営協議会を中心とした「子供」を支える体制を充実させる。

【方策】⇒　〇地域に開かれた、信頼される学校を目指して、教育活動を積極的に公開し、評価をもとに改善を図る。（ＰＤＣＡサイクル）

〇学校評価アンケート（年２回）を適正に実施し、学校運営協議会で協議・検討の上、次年度の教育課程に生かす。

〇学校運営協議会が中心となって、児童が参加できる地域行事や居場所を設け、地域に愛着や誇りをもつ子、地域の一員として積極的にかかわろうとする子を育てる。

【成果と課題】

保護者や地域住民による学校評価アンケートをひとつの指標として、学校のよりよい在り方を探った。自由記述に書かれた保護者の声を真摯に受け止め、できることは、すぐに改善したことについて、保護者の方々から評価していただいた。

学校評価アンケートは、保護者や地域住民の思いを知るための大切なツールであると認識しているが、いまひとつ回答率が良くない。今後、この回答率の数字をどう上げていくかは大きな課題である。

学校運営協議会の委員の方々には、児童の学びを支える活動や居場所づくりなどに尽力していただいた。また、常に学校経営を支えていただき、学校が苦しい時にも、一緒になって状況を打破する方策を考えていただいた。

来年度も、地域運営学校として、学校運営協議会への報告・連絡・相談を迅速に行い、協働して学校経営を行っていきたい。

（７）信頼される学校づくり

都民、市民からの信頼を損ねることのないよう、常に教育公務員であることを自覚するとともに、将来の日本を担う子供たちの教育に携わることに誇りをもって職務にあたる。

【方策】⇒　〇議論の中心は、常に「児童」であり、児童にとって良いこと、プラスになることを追究する教職員集団であり続ける。

〇教職員が個々の力を発揮しつつ、集団として結束して教育活動を行う。

〇服務事故防止に向けて、研修等を通して一人一人が倫理観を磨き、社会常識を身に付ける。

〇教職員間に、ハラスメントや確執を生まない職場づくりを目指す。

【成果と課題】

議論の中心は、常に「児童」、判断の基準は「児童にとってプラスかどうか」という意識で、教職員は指導に当たっていた。本校の教職員はチームワークが良く、協力、結束して教育活動や行事の準備などに当たっている。

個々の力を磨く時間がなかなか取れない日常ではあるが、研修などに積極的に参加して、専門性を高めてほしいと考える。

服務事故防止に向けては、教職員一人一人が意識を高めていく必要がある。今後も服務事故防止研修をはじめ、都から送られてくるふくむニュースレターなどを活用した日常的な指導を積み重ねていく。